

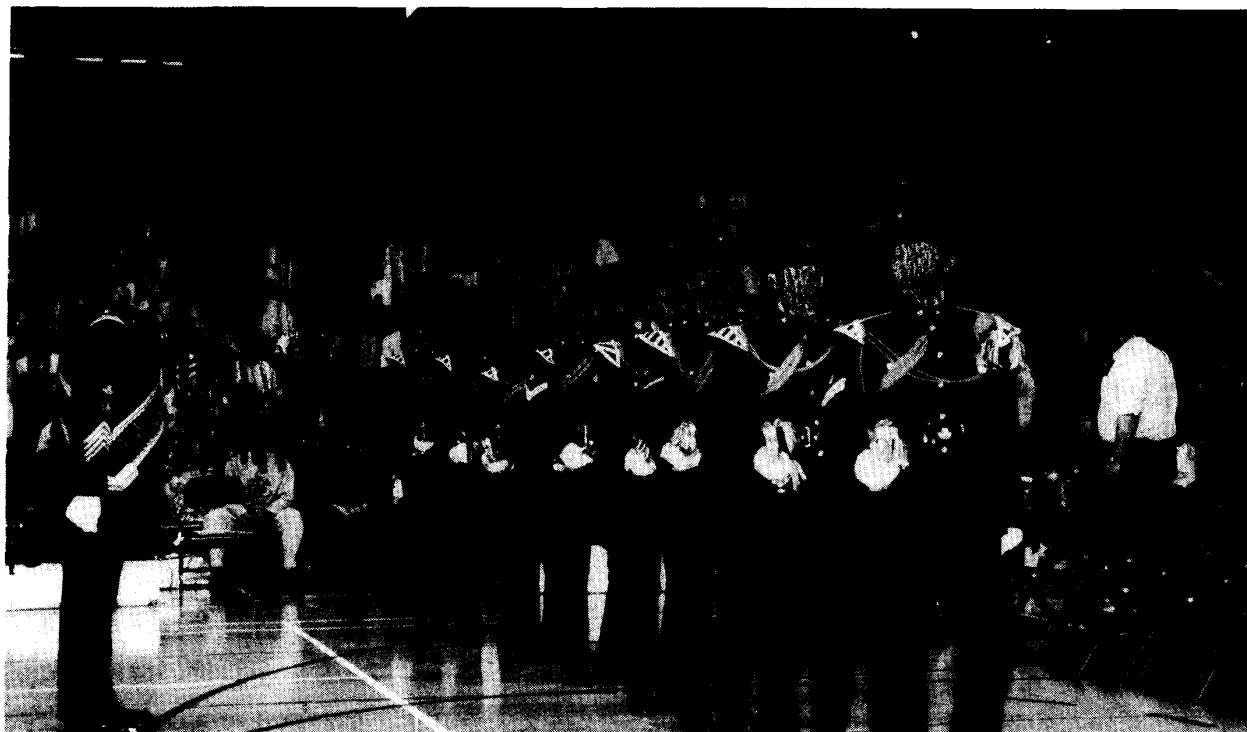
第三回松涛ワールドカップ(空手道)大会報告

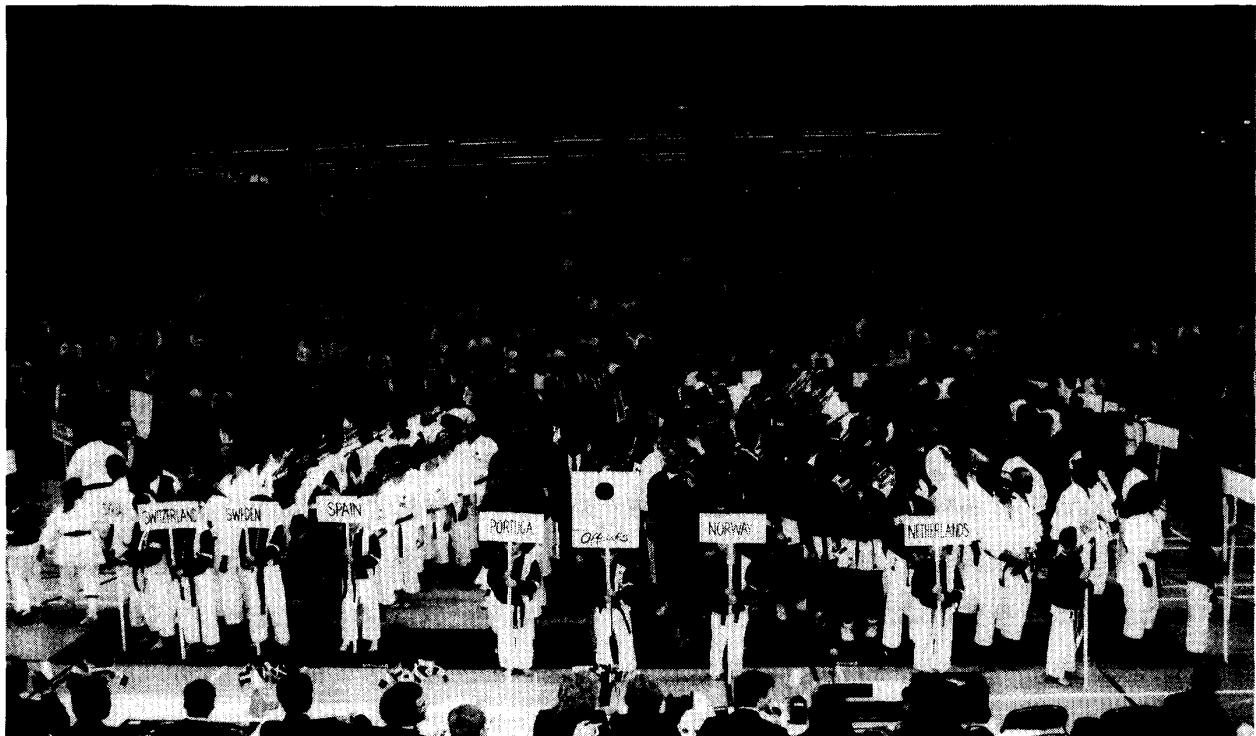
高橋 俊介

第三回松涛ワールドカップは1990年3月17日～18日の両日イギリスのSUNDERLANDで開催された。参加国は、JAPAN, ENGLAND, PORTUGAL, GRECE, IRELAND, SWEDEN, U.S.A., SPAIN, ITALY, CANADA, SWITZERLAND, MEXICO, NETHERLANDS, VENEZUELA, HUNGARY, BELGIUM, AUSTRALIA, NORWAY, FRANCE, FINLAND, CYPRUS, PAKISTAN, JAMAICA, DENMARKの22ヶ国が参加して盛大に開催された。

私は前回この大会のホスト国である、オーストラリアの役員として、また大会審判員として参加した。私は大会2週間前にオーストラリアに渡り各州に居る選手を指導して回り、3月11日SYDNEY国際空港より、イギリスに向け出発した。SYDNEY国際空港でBRISBANEから添乗して来た、オーストラリアチームの監督M. CONNOLLY、選手のG. SYMONS、R. CHAISTENSEN、B. HOFFMANE、A. WHARTONに会う。AUSTRALIA、SYDNEY、3月11日午後4時20分BRITISH AIRWAY機で一路イギリスに向う。離陸後機内サービスを受け、静かな空の旅の始まりである。最初の給油地、SINGAPOREまで7時間20分である。7時間程度の旅は毎回のことと気にならぬく過ぎた。

SINGAPORE空港に午後11時45分到着。機内から空港ロビーに出て身体を伸ばしていると、





MELBOURNEから別便で出発した女子選手B. COOKと偶然に会う。暫しの間、空港ロビーで話をして時間を潰す。彼女はQ.F.機でイギリスに向かって我々より20分ほど先に出発していった。我々もすぐ後を追うようにまた機内にもどり機上の人となった。機が飛びたって暫くすると機内放送で不幸にも映写機が故障で今回のフライトでは映画の上映ができないとのことである。そのうえSINGAPOREからの乗客で機内は満席である。SINGAPOREとLONDON間のフライト時間は14時間である。映画の上映もなく、SYDNEYを発ってから夜ばかりを追っての旅である。機内で途中から退屈になり、本を読み始めたり、日記を書いたり、機内サービスのビールを飲んだりして時間を潰すが、気分は最悪である。それにしても14時間は本当に長い旅である。前回オーストラリア大会に参加された、イギリスの指導員榎枝師範が、オーストラリアに到着するなり一言、こんな遠い国があるのかと言った一言を思い出し一人で笑ってしまった。

それでも兎も角無事、イギリス・ロンドン・ヒースロー空港に、イギリス3月12日午前5時30分に到着した。入国手続きも何事もなく終え外に出る。我々の空の旅はこれで終りでなく、リムジンバスで国内線ターミナルに向かう。国内線ターミナルで荷物を預け、国内線NEWCASTLE空港への乗り継ぎ時間が6時間程あるので空港からロンドン市内に地下鉄で選手と市内見学に向う。ウエストミンスター駅を降りるとまずビックベンの時計台が目に入る。イギリスに着いた実感がわきあがってきた。我々オーストラリアチームには市内見学の為の時間的余裕がないので早足で、ウエストミンスター寺院、バッキンガム宮殿を見て回る。時間も残り少なくなってきたので、ロンドン市内で皆んなで朝食をすることにした。飛行機の機内食にうんざりしていたので早速ステーキの注文である。オーストラリアの値段に比べるとかなり高い

ようである。これから先が思いやられそうである。それでもステーキの朝食で元気を取り戻し再び地下鉄でヒースロー空港へ向う。

午後1時のBRITISH AIRWAYS機でNEWCASTLEに向かう機上の人となる。機内で時計を見ると、オーストラリア時間で、もう3月13日になっている。オーストラリアを出発してもう3日間をついやしているのには驚かされた。恐ろしく長い旅である。

約1時間の飛行の末、NEWCASTLE空港に到着、空港には女子選手のB. COOKが我々を待っていてくれた。我々もかなり疲れているが彼女もそうとう疲れている様子である。到着後大会本部が回してくれたバスで、今大会中オーストラリアチームの宿舎となるWASHINGTON MOAT HOUSEに向う。バスで約20分程のSUNDERLANDの町である。ホテルに到着するとすぐに各自でチェックイン、鍵を受け取り部屋で30分程休んで、午後4時より全員で練習、長旅による気分的疲労を取るのは練習をするのが一番である。そして今夜はベッドで思いきって身体を伸ばして眠るのが海外遠征の時は大切である。

練習で汗を流し、温水プールで泳いだり、サウナに入ったりして気分をリフレッシュをし、旅の垢を落して部屋に戻る。部屋にもどった後、着換えをして今夜はホテルのレストランで皆んなで食事をする。食事の時メニューを見て一同値段の高いのに驚く。私も今日から10日間どうなるかと心配していると、我々の気持を察したのか、マネージャーが我々のテーブルに来て、オーストラリアチームには特別に滞在期間中食事の料金を半額にしてくれるとのことである。さすがに同盟国と選手一同大喜びである。食後マネージャーに感謝し我々は部屋に戻りすぐにベッドに入る。さすがに皆、疲れているせいか今夜は誰も外室することなく深い眠りに入った。





翌朝、イギリス3月13日、午前8時全員が良く眠ったせいか清々しい顔で食事のためにレストランに集合してきた。朝食もオーストラリア人らしくすごい食欲である。その姿を見て、私も監督のM. CONNOLLYも安心した。食後、今日からの練習日程を説明する。試合までの練習日程は毎朝7時起床、ホテルの横のゴルフコース内を散歩することに始まる。午前中の練習は10時から12時まで、午後の練習は3時から5時まで、オーストラリアチームはまだまだ国際試合の経験が浅い為に、試合前であるが練習は充分しなければならない。

最初の練習が始まってみるとまだ少しの選手の動きが宙に浮いている様子だったが、午後の練習に入ると皆、足がしっかりと地に付いた様に動きが良くなっている。基本、組手、個人型、団体型と練習。今日と明日は身体を苛めても良い予定で練習メニューを進める。選手も練習で汗を流したせいか完全に元気を取り戻した。

練習後シャワーを浴び、今夜は町に出て夕食を取ることにした。オーストラリアチームの選手を世話してくれるイギリスの生徒が我々をSUNDERLANDの夜の町を案内してくれた。彼の案内で入ったイギリスのアンティック調のパブレストラン、古いイギリスの伝統を今も残す雰囲気はもう何とも言えない気分である。ビールを飲みながらボリュームのある食事、本当に“気分は最高”と一言いわずにいられない程すばらしいパブレストランである。しかし我々は観光旅行に来て居る訳では無いので残念ではあるが、10時にはホテルにもどる。ホテルに戻ると、後の便で到着したW. STARKが居た。これでオーストラリアチーム全員が揃うことになる。安心して部屋に戻り、ベッドに入る。

3月14日、午前7時、全員朝の散歩に出掛ける。散歩の後全員一緒に朝食、選手は朝から食



欲旺盛、何も心配することは無い。10時午前の練習を始める。練習を始めて30分程過ぎた時日本チームが到着したのが目に入る。練習の後の再開が楽しみである。選手も日本チームが目にに入ったのか、練習に熱が入り、動きも良く、選手一人一人が自覚して練習している。

午前の練習を終え、ホテルのロビーに行くと、イギリスの指導員榎枝師範、日本から来た田中師範の二人が話をして居る。久しぶりに御会いする二人の師範に挨拶をし再会を喜ぶ。久しぶりの再会に話しもすぐ花が咲き、時の過ぎるのも忘れてロビーで話しに夢中になってしまった。選手が道衣に着換え迎えに来た。時計を見るともう午後の練習の始まる3時である。練習後に会う約束をし、急いで道衣に着換え道場に行く。今まで練習で身体を苛めるメニューだが、選手の動きも良く、仕上りは順調である。練習を見ていると指導員の欲目かつつい何か期待が大きくなってしまう。そんな期待を持たせてくれる選手に満足しながら午後の練習を終える。

練習後シャワーを浴び着換えをしてロビーに行くと、今度はアメリカチームを連れて来た、矢口師範、高階師範が居る。二人の師範に御会いするのも何年振りである。本当に懐かしい限りである。榎枝師範、矢口師範、田中師範、高階師範それに私と連れ立ってホテルのバーに直行、まずはビールで再会を祝し乾杯、話しに事欠くことの無い方々ばかりである。話しが進にしたがい、アルコールの量も益々上がる一方である。この雰囲気こそ、我々海外で指導するのが世界大会に参加して持つもう一つの楽しみである。話しが盛り上がるにつれ、すっかり時の過ぎるのを忘れてしまった。時計を見るともう夜中、午前2時である。話しの続きは、明日以降到着する師範の方々を待つことにして、とりあえず今夜はお開きとすることで各々部屋に

戻っていった。

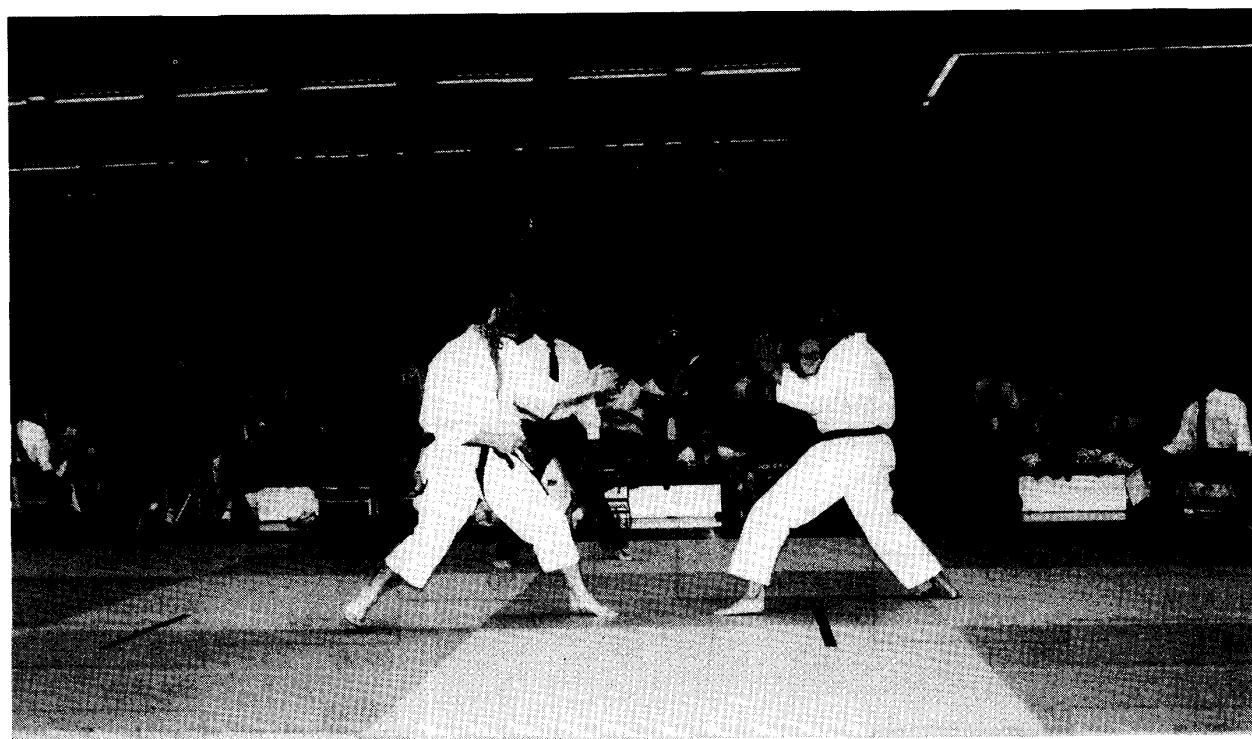
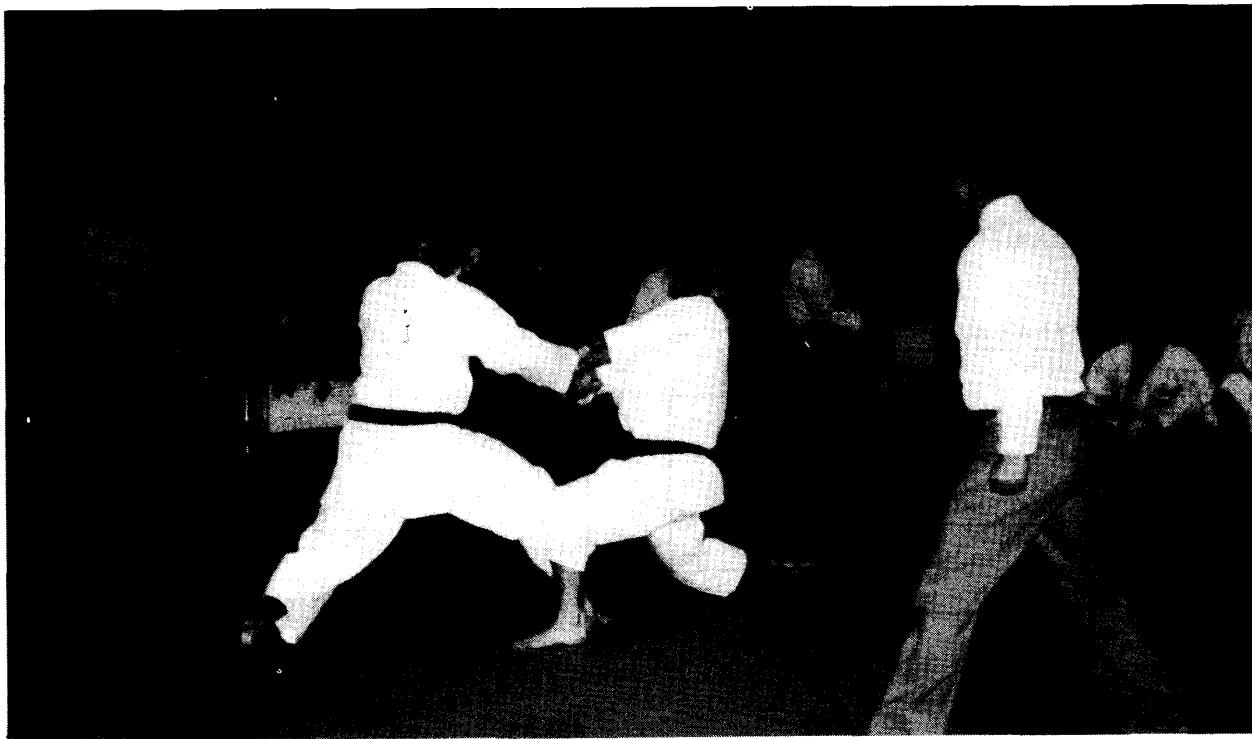
3月15日、今日のオーストラリアチームの練習は監督のM. CONNOLLYに任せ、私は審判委員会に参加する。午前中は審判用語の徹底を図る講習である。各々の国で少しずつ違う用語の解釈があったりして戸惑うことも少なくない。昼食を挟んで、午後は審判動作の徹底を図るものである。世界大会の度に審判講習会は開かれるのであるが、審判として参加しても技術的な面で不馴れであったり、技を見極める判断に劣る者も居るので講習会は厳しいものとなったが、参加者全員が真剣にならざるを得ない雰囲気である。この雰囲気こそ大会を成功させる重要な鍵であると思われる。講習会場を見回すと、海外で指導されて居る日本人指導員の錚錚たるメンバーが目に入る。講習会の後、今夜も昨夜と同じく懐かしい方々と御会いし、話しが出来ると思うと胸が踊るようである。

講習会の後、空手協会を卒業した海外指導員と日本から参加の指導員全員が懇談会のような形で集まり、日本国内指導員に本部の現況などを説明してもらうとともに、海外から本部への要望など各々の国の忌憚のない意見の交換が行なわれた。その後は昨夜の続きの様を体してきた。アルコールの量が多くなるにつれ、懐かしい本部道場で過ごした研修時代が思い出され頭が熱くなる。本当に大会に参加して良かったと思う。今夜ももう2時を回ったのでお開きにして各々部屋にもどる。

3月16日、私は昨日と同様に審判講習会に参加するので、オーストラリアチームの練習は監督のM. CONNOLLYに各自が軽い練習で調整する様指示して彼と別行動を取る。審判委員会の会場を見回すと、さすがに皆様お疲れの様子である。それでも講習会は、イギリスの生徒に実際に試合をしてもらい、用語、実技動作、技の見極めなど、一人一人が実際の場面で審判をやりながら厳しいチェックを受けて明日から始まる試合の、主審、副審が選ばれた。講習会の後、さすがに皆さん疲れているのか、足早に部屋に戻っていった。私も部屋に戻り夕方6時まで眠ってしまった。部屋のドアがノックされる音で目を覚ます。オーストラリアチームの監督が選手と一緒に食事をするので迎えに来てくれたのである。着換えをしてレストランに行くと、各国の指導員も選手と食事をして居る。自然にお互いに近くに座ってしまうものである。暗黙のうちにビールが運ばれて来る。ついつい手が出てしまう。でも今夜は早くベッドに入るつもりだ。食事を終え時計を見るともう午後10時に近い。皆さんに挨拶をして先に部屋に戻る。

3月11日、いよいよ今日は大会の日である。朝8時、バスで試合会場に向う。会場はSUNDERLANDスポーツセンター。会場は前売切符二千枚が売られたとのことで客席は満員である。場内は熱気に包まれて、世界大会の雰囲気を高めている。今日の試合は全ての個人戦である。試合前に開会式が行なわれた。午前9時30分、男子個人戦組手試合から始まる。その後は女子個人戦型試合、男子個人戦型試合、女子個人戦組手試合、午後5時より全試合決勝戦である。

男子個人戦組手試合は、2回戦以降、128名によるトーナメントで争われ熱戦が繰り広げられ



た。個人戦組手の注目は、前回オーストラリア大会で優勝している、日本代表の今村選手の二連覇なるか、それとも、この大会初の外国選手が日本選手を抑えて優勝者を出すかに注目された。注目の日本選手は2回戦で小池選手が敗れるという暗いムードでのスタートである。暗いムードはこの後すぐに起きた。全日本空手道選手権大会優勝の経験者である小倉選手が3回戦で敗れ、最も注目された今村選手も4回戦で、SWEDENのJENSEN選手に敗れる番狂わせが

あり、会場はいやがうえにも熱気と興奮に包まれてきた。日本選手、決勝にただ一人、香川選手を残すのみとなり、日本代表団と応援団にも焦りの雰囲気が感じられた。しかし、香川選手は全日本選手権大会2回優勝の経験と多くの海外遠征の経験からくる自信か、地元選手を応援する会場に起る大声援のプレッシャー、日本から来た応援団の声援のプレッシャーにも屈す

男子組手試合（個人戦）2～3～4回戦

IMAMURA	IMAMURA
SELE	(JAP)
O'KEEFFE	MELOINE
MELOINE	(ITA)
TAKESHITA	TAKESHITA
ADOU	(CAN)
GARCIA	JANSEN
JENSEN	(SWED)
ORTIZ	ORTIZ
MICHAELIDES	(FIN)
BRUNNER	ORTIZ
MARTAKIS	BRUNNER
SILVA	(SWIT)
CLAESEN	SILVA
HARFORD	(PORT)
WHARTON	SILVA
WHARTON	(PORT)

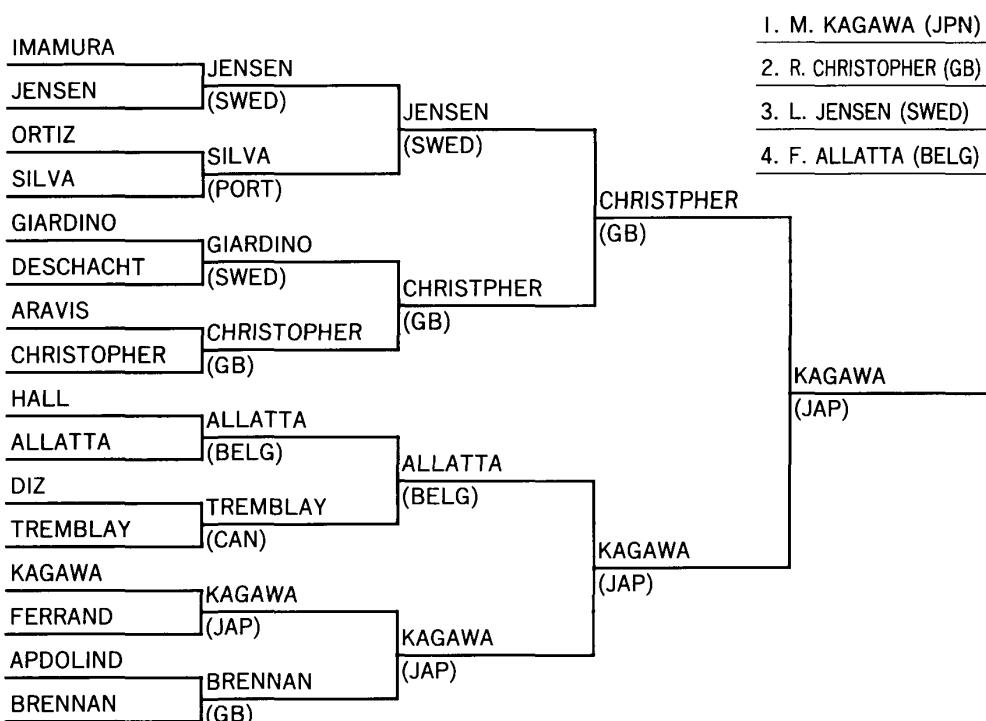
OGURA	OGURA
(JAP)	BUSA
GIARDINO	GIARDINO
(SWED)	ALVARD
DESCHACHT	ANTHANASOPOULOS
(BELG)	DESCHACHT
GRONNINGEN	GRONNINGEN
(NOR)	PEZIER
DUNNE	DUNNE
(IRE)	ELHATRI
ARAVIS	ARAVIS
(CYP)	MORACEJ
SYMONS	MIRABAL
(AUST)	SYMONS
CHRISTOPHER	CHRISTOPHER
(GB)	HANSEN

男子組手試合（個人戦）2～3～4回戦

HALL	HALL
KOIKE	(GB)
VASILTOU	HALL
NIELSEN	(GB)
HANSSON	NIELSEN
TRACHSEL	HANSSON
ALLATTA	(SWED)
ALLATTA	ALLATTA
SMITH	(BELG)
DIZ	ALLATTA
LARSEN	DIZ
HOFFMANN	(PORT)
RAMIREZ	DIZ
BOUDRINI	HOFFMANN
TREMBLAY	(AUST)
MURPHY	TREMBLAY
CAMPANATI	(CAN)
CAMPANATI	TREMBLAY
CAMPANATI	(CAN)

ANDERSSON	ANDERSSON
(SWED)	KHOURY
KAGAWA	KAGAWA
(JAP)	MAYROVOUNIOTES
FERRAND	FORTE
(USA)	FERRAND
WOOLERY	WOOLERY
(JAM)	FOIS
PAVAN	CREASEY
(SWIT)	PAVAN
ARDOLINO	ARDOLINO
(ITA)	PLANCKE
POUELSEN	STARK
(DEN)	POUELSEN
BRENNAM	BIRBAKOS
(GB)	BRENNAN

男子組手試合（個人戦）5～6回戦～決勝

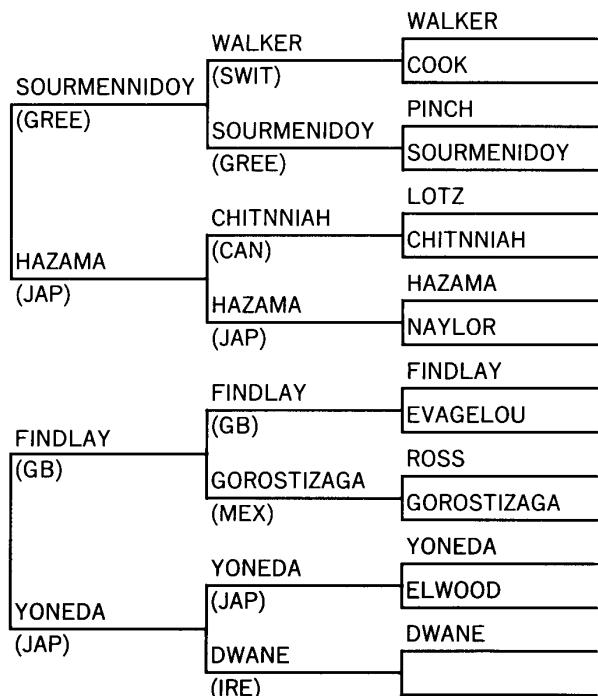
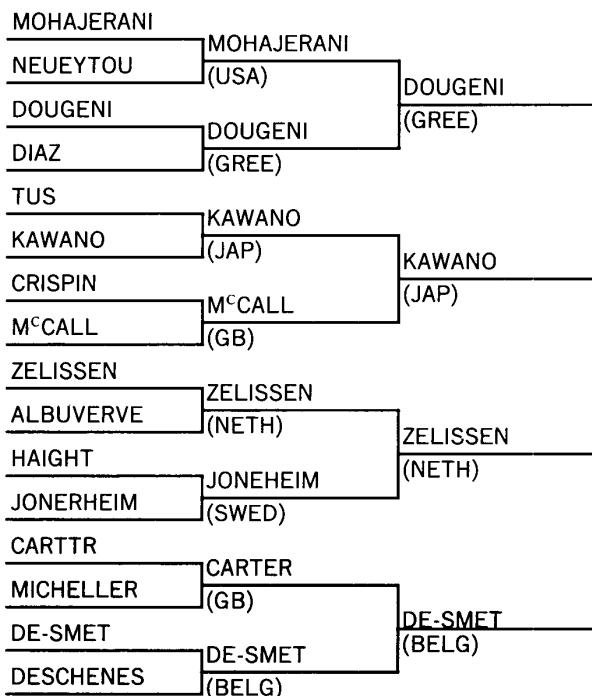


ることなく、決勝戦に進出する。小さな身体の香川選手のどこに隠されているのかと思われる、気迫と精神力は、外国選手及び観客の間でも絶賛の的である。決勝戦は地元GREAT BRITAIN代表のR. CHRISTOPHER選手と日本代表香川選手の間で争われた。試合は香川選手が上段回し蹴りから相手の態勢を崩して中段に低く入っての突き技が冴えて連続二本の技有りを取って

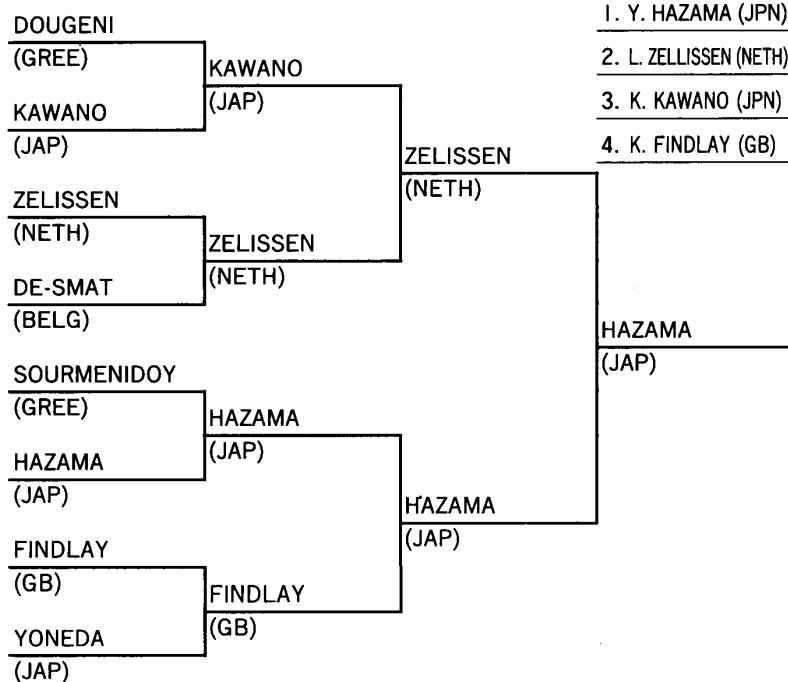
鮮やかな一本勝である。会場は二人の選手の健闘を称える割れんばかりの拍手で男子個人戦組手試合は終った。

女子個人戦組手試合は今大会初めての種目であるが、2回戦以降32名の選手によるトーナメントで争われた。初めての種目のせいか、各国選手とも1～2～3回戦まで相手選手の出方を

女子組手試合（個人戦）2～3～4回戦



女子組手試合（個人）5～6回戦～決勝戦



窺っている様子であった。日本選手は米田選手が5回戦で敗れるまで順調に勝ち進んだが、準決勝で、この種目で全日本大会優勝経験のある河野選手が敗れるハプニングが起ったが、狭間選手がNETHERLANDS代表のL. ZELLISEN選手を破ってこの種目初優勝を飾った。

型試合は男子、女子共1～2回戦は、指定型を二人の選手が紅白に別れて行ない、フラッグ

男子型試合（個人戦）2～3～4回戦

KAGAWA	KAGAWA
ALTORFER	(JAP)
MONDRAGON	SYMONS
SYMONS	(AUST)
KHALTL	SOFIANIDIS
SOFIANIDIS	(GREE)
CREASEY	ROBERTS
ROBERTS	(GB)
MIRABAL	MIRABAL
YASILIOU	(VEN)
MARTENS	JONES
JONES	(CAN)
LEPAGE	ARAGON
ARAGON	(USA)
SELE	SELE
WOOLERY	(NOR)

RIJKERS	KALUZNY
KALUZNY	(BELG)
ROMANO	(SWIT)
NOCEFA	(MEX)
KEE	(SWED)
OGURA	(JAP)
OGURA	(JAP)
NELSON	(USA)
MAZZETTO	(ITA)
MAZZETTO	(ITA)

男子型試合（個人戦）2～3～4回戦

CHRISTOPER	ULAD
ULAD	(MORO)
WEWENGKANG	GARCIA
GRACIA	(MEX)
LARSEN	LARSEN
CROCKFORD	(NOR)
ALEXANOROU	ALEXANOROU
BOUDRINI	(CYP)
ALLATTA	TARRANT
TARRANT	(USA)
BRUNNER	AIHARA
AIHARA	(JAP)
BIRBAKOS	HICKEY
HICKEY	(IRE)
ROUDOT	STARK
STARK	(AUST)

TANAKA	TANAKA
TANAKA	(CAN)
BRENNAN	BRENNAN
BRENNAN	(GB)
COST	COST
COST	(PORT)
NUWEZ	NUWEZ
NUWEZ	(MEX)
COSTA	COSTA
COSTA	(PORT)
HOFFMANN	HOFFMANN
HOFFMANN	(AUST)
HASHIGUCHI	HASHIGUCHI
HASHIGUCHI	(JAP)
OKAZAKI	OKAZAKI
OKAZAKI	(USA)

による勝抜き戦、3～4回戦は、選定型による紅白フラッグ方式、決勝戦は上位8名の選手による、得意型得点方式で行なわれた。型試合は第1回大会、第2回大会とも日本選手の独壇場であった。予想通り日本選手全員が決勝戦に進出したが、地元BRITAIN代表のF. BRENNAN選手の準優勝は、海外における空手道の技術が日本とそうとう縮んだと見てよいのではないか。日本代表の相原選手の優勝は予想通りであったが、日本代表の香川選手の3位入賞は組手試合優勝と合せ総合優勝というすばらしい記録である。

KAGAWA	M. KAGAWA
ROBERTS	(JAP)
JONES	O. JONES
ARAGON	(CAN)
KALUZNY	P. KEE
KEE	(SWED)
OGURA	Y. OGURA
MAZZETTO	(JAP)
GARCIA	G. LARSEN
LARSEN	(NOR)
AIHARA	T. AIHARA
HICKEY	(JAP)
BRENNAN	F. BRENNAN
COST	(GB)
HASHIGUCHI	Y. HASHIGUCHI
OKAZAKI	(JAP)

男子型試合（個人戦）5回戦～決勝

ORDER	NAME	COUNTRY	KATA	SCORE	RESULT
1	Y. HASHIGUCHI	JAPAN	GOJUSHIHOSHO	41.8	4
2	P. KEE	SWEDEN	UNSU	41.7	5
3	M. KAGAWA	JAPAN	UNSU	42.3	3
4	G. LARSEN	NORWAY	GOJUSHIHOSHO	40.6	7
5	Y. OGURA	JAPAN	GOJUSHIHOSHO	41.5	6
6	T. AIHARA	JAPAN	UNSU	42.7	1
7	F. BRENNAN	G.B.	NIJUSHIHO	42.6	2
8	D. JONES	CANADA	JITTE	39.9	8

女子個人戦型試合は、前回オーストラリアで国際試合で初めて優勝して以来、今大会まで3年間行なわれた国際大会及び日本国内の大会で全て優勝している三村選手が注目を集めたが、三村選手はそんなプレッシャーをものともせず、各国選手を寄せつけぬ実力で堂々の二連覇である。注目された点はSWEDEN代表のL. PYREE選手が他の日本人選手を抑えての準優勝である。

3月18日、大会二日目、昨日の興奮がまださめやらぬ雰囲気の大会会場である。今日の試合は全て団体戦である。試合は男子組手団体戦から始まった。男子組手団体戦は16ヶ国の参加で開催された。注目はやはり日本チームである。海外で空手道を指導する日本人海外指導員が日本チーム打倒に傾けた情熱を見せる場でもある。予想通り日本チームは断然の強さで決勝に進出した。決勝戦は日本チームと地元GREAT BRITAINチームの間で行なわれた。試合が始まつすぐに思わぬ波乱が起き、会場は興奮の渦に巻き込まれた。日本チーム先鉢が敗れたのである。地元チームの選手を応援する観衆の声援で場内は割れんばかりの拍手である。そんな雰囲気の中、プレッシャーが若い日本選手を襲ったのか、次鉢、中堅の選手が敗れ、副将戦、大

女子型試合（個人戦）2～3～4回戦

MIMURA		MIMURA	
ALBUYUERUE	(JAP)	MIMURA	
SULLIVAN	(IRE)	SULLIVAN	(JAP)
JONERHEIM			
PINCH	PINCH	KENNEL	
TORRES	(USA)	KENNEL	(SWIT)
KENNEL			
ROSS	(SWIT)		
ASANO	ASANO	ASANO	
DWANE	(JAP)	ASANO	
SEGURA		SEGURA	(JAP)
DIAZ	(SPA)		
DONNOLLY	DONNOLLY	GOROSTIZAGA	
KLINKERS	(GB)	GOROSTIZAGA	(GB)
DOUCENI			
GOROSTIZAGA	(MEX)		

PYRREE		PULLEN	
(GB)		PYRREE	
PYRDD	(GB)	KAWANO	
		(JAP)	MICHELLER
FLICK	FLICK	WALKER	
CHINNIAH	(CAN)	CHINNIAH	(CAN)
		ANDREU	
CARTER	(GB)	CHINNIAH	CRISPIN
			DESCHENES
NAKAMURA	(JAP)	DESCHENES	(CAN)
		CARTER	
		MDHAJERANI	PAPADAKOU
		(JAP)	COOK
		NAKAMURA	MDLINA
		(JAP)	NAKAMURA

女子型試合（個人戦）決勝

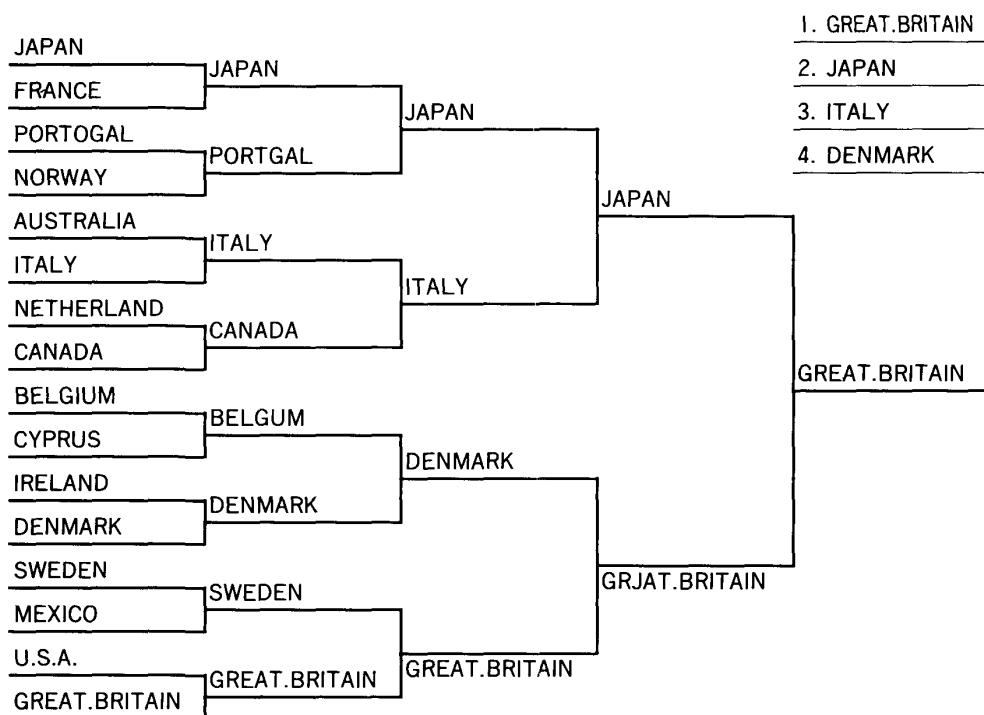
ORDER	NAME	COUNTRY	KATA	SCORE	RESULT
1	C. DONNELLY	G.B.	GOJUSHIHOSHO	38.2	5
2	Y. NAKAMURA	JAPAN	UNSU	39.2	4
3	J. CARTER	G.B.	UNSU	37.9	6
4	W. MIMURA	JAPAN	UNSU	40.8	1
5	M. ASANO	JAPAN	UNSU	39.7	3
6	L. PYREE	SWEDEN	UNSU	39.8	2
7	A. KENNEL	SWITZERLAND	GOJUSHIHOSHO	37.5	8
8	L. CHINNIAN	CANADA	NIJUSHIHO	37.7	7

将戦を残して日本チームの負けが決まってしまった。会場は嵐のような声援を受ける地元選手と、敗れた日本選手の茫然とした姿は見るも哀れの感である。初めて日本チームが負けた日でもある。これはいかに世界の空手道が高い水準にあるかを物語るものである。この出来ごとを機に海外日本人指導員の打倒日本チームに傾ける情熱は益々強くなるだろう。

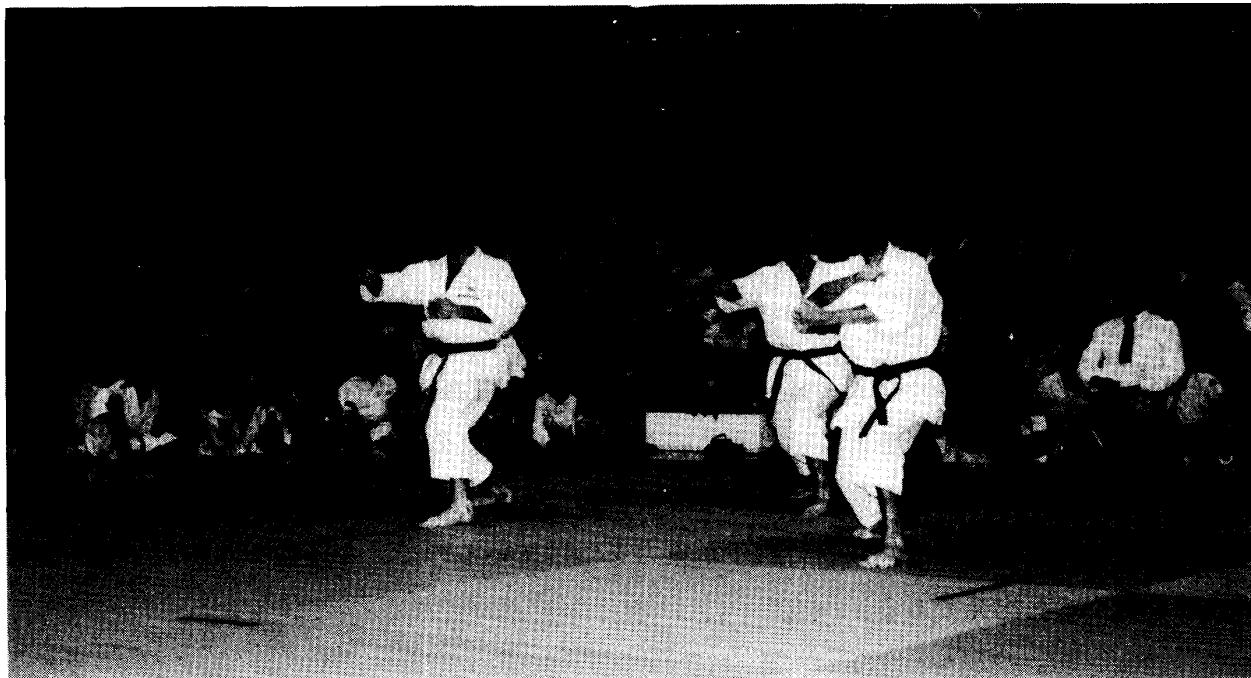
男子型団体戦は11ヶ国参加で行なわれた。団体型試合は、三人一組で得意型を演じ、得点方式で、1回戦上位8チームが決勝に進出する。決勝戦は1回戦と違う得意を演じ、得点方式で順位を決める。試合は前回のオーストラリア大会で日本チームと同点決勝戦で敗れたBELGIUMチームが、今回はどこまでやるかが注目された。しかし今大会の日本チームは各国を圧倒する強さを発揮しての優勝である。女子型団体戦は参加6チームと少なく残念であったが、日



男子組手試合（団体戦）2～3～4回戦～決勝



本チームの選手構成は個人戦型優勝の三村選手、第1回大会優勝者の中村選手、今大会個人戦型3位の浅野選手と最強のチームメンバーで臨み各国チームに大差をつけての圧勝である。この女子団体型の試合は当分の間日本チームの王座は揺るぐことはないものと思われる。



男子型試合（団体戦）予選

COUNTRY	KATA	SCORE								TOTAL
JAPAN	GOJUSHIHOSHO	7.8	8.0	7.9	8.0	7.7	7.1	8.1		39.4
CANADA	SOCHIN	7.5	7.6	7.7	7.8	7.4	7.5	7.8		38.1
NETHERLANDS	UNSU	7.4	7.4	7.4	7.1	7.3	7.3	7.4		36.8
FRANCE	UNSU	7.6	7.5	7.5	7.3	7.4	7.5	7.5		37.4
SWITZERLAND	GOJUSHIHOSHO	7.6	7.7	7.6	7.6	7.4	7.6	7.6		38.0
AUSTRALIA	UNSU	7.4	7.6	7.6	7.3	7.3	7.5	7.4		37.2
GREAT BRITAIN	NIJUSHIHO	7.9	7.8	8.1	7.8	7.7	8.4	7.9		39.5
MEXICO	GION	7.4	7.4	7.6	7.4	7.3	7.1	7.3		37.1
U.S.A.	UNSU	7.8	7.7	7.9	7.8	7.6	8.1	7.7		38.9
IRELAND	SOCHIN	7.4	7.7	7.7	7.5	7.4	7.6	7.6		37.8
BELGIUM	UNSU	7.6	7.7	8.0	8.1	7.8	8.3	7.7		39.3

男子型試合（団体戦）決勝

COUNTRY	KATA	SCORE								TOTAL	
CANADA	KANKUSHO	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0		40.0	7
SWITZERLAND	KANKUSHO	8.2	8.1	8.2	8.1	8.2	8.2	8.4		40.9	5
BELGIUM	GOJUSHIHOSHO	8.5	8.4	8.4	8.5	8.5	8.4	8.3		42.2	2
IRELAND	EMPI	7.9	7.8	8.0	7.8	7.9	7.9	7.9		39.4	8
FRANCE	GOJUSHIHOSHO	8.2	8.1	8.2	8.1	8.1	8.1	8.0		40.6	6
GREAT BRITEN	KANKUSHO	8.5	8.5	8.3	8.4	8.3	8.3	8.1		41.8	3
U.S.A.	EMPI	8.2	8.3	8.3	8.3	8.4	8.3	8.0		41.4	4
JAPAN	UNSU	8.6	8.6	8.5	8.6	8.6	8.4	8.6		42.9	1

女子型試合（団体戦）決勝

COUNTRY	KATA	SCORE							TOTAL	
JAPAN	UNSU	8.6	8.7	8.5	8.6	8.5	8.5	8.7	42.9	1
CANADA	KANKUSHO	8.2	7.7	8.0	8.0	8.0	7.9	8.2	40.1	5
U.S.A.	BASSAI-DAI	8.3	8.2	8.1	7.9	8.2	8.1	8.2	40.8	4
GREAT BRITAIN	GOJUSHIHOSHO	8.4	8.3	8.3	8.4	8.3	8.4	8.4	41.8	2
IRELAND	EMPI	8.0	7.8	7.9	7.9	7.9	7.8	7.8	39.3	6
SPAIN	NIJUSHIHO	8.5	8.2	8.1	8.4	8.3	8.3	8.5	41.7	3

第三回松涛ワールドカップ大会は、地元GREAT BRITAIN男子組手団体試合優勝とBELGIUM男子型チームの準優勝と各種目に熱戦が繰り広げられるとともに、大観衆の声援が大会を盛り上げ大成功で、次の開催地“東京”での挨拶で大会の幕を降ろした。オーストラリアチームの活躍は見られなかつたが若い選手が実力をつけているので、今後益々の練習と海外遠征の経験を積んで再出発である。